**受難節第２主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年3月16日**

**「私のように」**

**列王記下２章9～10節**

 **2:9 渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」エリシャは、「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言った。**

 **2:10 エリヤは言った。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」**

**使徒言行録26章24～32節**

**26:24 パウロがこう弁明していると、フェストゥスは大声で言った。「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ。」**

 **26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、わたしは頭がおかしいわけではありません。真実で理にかなったことを話しているのです。**

 **26:26 王はこれらのことについてよくご存じですので、はっきりと申し上げます。このことは、どこかの片隅で起こったのではありません。ですから、一つとしてご存じないものはないと、確信しております。**

 **26:27 アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」**

 **26:28 アグリッパはパウロに言った。「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」**

 **26:29 パウロは言った。「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」**

 **26:30 そこで、王が立ち上がり、総督もベルニケや陪席の者も立ち上がった。**

 **26:31 彼らは退場してから、「あの男は、死刑や投獄に当たるようなことは何もしていない」と話し合った。**

 **26:32 アグリッパ王はフェストゥスに、「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」と言った。**

1.

**私たちは先週先々週とパウロの弁明から共に御言葉を聞きました。思い出していただければと思いますが、パウロが弁明をした裁判の場というのは、新しくカイサリアに総督として着任したフェストゥスがパウロをローマ皇帝のもとに護送するのに、彼がパウロに何も罪を見いだせないために困ってしまってユダヤ人の王であるアグリッパ王に助けを求めたものです。アグリッパ王の前でパウロの裁判を開くとユダヤ人であるアグリッパ王ならユダヤ教の事に詳しいので、何らかの罪を見いだせるに違いないというフェストゥスの思惑から開かれた裁判でありました。**

**そのパウロにとっては非常に不利な立場の裁判で弁明をしたのが26：2から記されています。かつてパウロは熱心なユダヤ教徒であった。神が約束して下さった救い主が十字架の死から復活して再び私たちの元に来て下さる、イエス・キリストこそが救い主であり、死者の復活を信じるがゆえにユダヤ人たちから訴えられている。かつては私もイエスこそが救い主と信じるキリスト教徒と教会とイエスを激しく迫害していた。そんな私が迫害のためにダマスコに向かう途中に太陽よりも明るく輝く光であるイエス様が私に出会って下さり、私を暗闇の中から救い出して下さった、それはイエス様が私をイエス様の復活の証人とし、かつての私のように暗闇にいる人たちがイエス様を信じることで光の中を歩むことができるようにイエス様が遣わして下さった。そして、私は聖書に書かれていることを忠実に語って来た。しかしそれは私一人が頑張って語ったのではなくて復活されたイエス様ご自身が今も生きておられて働いておられて語ってくださる。イエス様ご自身が真の光を語り伝えてくださる。**

**パウロが語った弁明は自分の身の潔白を証明するものというよりも、キリスト者の証しと言えます。そしてイエス・キリストの十字架と復活の福音を語る説教とも言えるでしょう。**

**パウロが語る証しは、説教はパウロだけの出来事でしょうか。どこか遠い昔に私たちからすると遠い中東地方のいわばどこか世界の片隅で起こった出来事でしょうか。決してそうではありません。これは私たちの出来事です。イエス様は今を生きる私たちに出会って下さったのです。私たちを一人一人を暗闇の世界から光の中を歩むように救い出して下さったのです。そして、かつての私たちのように暗闇の中を歩む人がイエス様と出会って光の中を歩むことができるように私たちをイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝える者へと召し出して下さっているのです。**

**もちろん私たちはそれぞれに救われた状況は異なりますが、イエス様が私たちと出会って下さったことには変わりありません。ですから、パウロの出来事が私たちの出来事であることを御言葉から聞いて、私たちもパウロのようにイエス様と出会って救われた喜びを力強く証しをしたいと思うのです。それが私たちのなす伝道です。そしてもちろん私たちが一人で頑張るのではなくて教会の兄弟姉妹がいます。何よりもイエス様が今も生きて働いて下さるのです。聖霊の力によって私たちの伝道の業を強めてくださるのです。**

**パウロの弁明という名の証しあるいは説教を聞いたフェストゥスは「お前は学問のしすぎで頭がおかしくなった」と言いました。パウロが熱心に学ぶ者と認めつつも、学問をしすぎたから死者の復活などありえないことを信じているとパウロの弁明を途中で遮って大声で叫んだのです。**

**それに対してパウロは反論します。「私は真実で理にかなったことを話しているのです」そしてアグリッパ王に向けて再び語るのです。「王はこれらのことについてよくご存じです。イエス様の十字架と復活はどこか世界の片隅で起こったことではない。あなたはよく知っているはずだ。」さらに27節でこのように言います。**

**「アグリッパ王よ、預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思います。」**

**この文章を直訳しますと「あなたは信じるか。アグリッパ王よ。預言者らを。あなたが信じることは、私が知る。」になります。「あなたは信じるか」とパウロはまずアグリッパ王に問い詰めるのです。そして「あなたが預言者達を信じていることを私は知っている」とアグリッパ王に言い逃れができないように問い詰めているのです。「預言者達を信じるなら預言者が語る神の言葉を信じているはずだし、預言者達が聖書で示しているイエス様をあなたは信じなければならない」「どうなのか信じるのか信じないのか」と信仰の決断を迫るのです。**

**それに対してアグリッパ王は「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」（28節）**

**と答えます。「信じる」と言えば、イエス様が救い主であると信じてキリスト者となることになります。反対に「信じない」と言えばアグリッパ王は預言者達を否定してしまうことになります。そうすると聖書の預言者達を熱心に信じているユダヤ人たちを敵に回すことになるのです。アグリッパ王が支配を任せられているのはユダヤ人たちです。そのユダヤ人たちを敵に回すとこれは非常に厄介なことになります。そこで彼は「短い時間でわたしを説き伏せて、キリスト信者にしてしまうつもりか。」との言葉で逃げたのです。信じるでもない信じないでもないいわばグレーゾーンの答弁をしたのです。**

**そのようなアグリッパ王にパウロは言います。**

**「短い時間であろうと長い時間であろうと、王ばかりでなく、今日この話を聞いてくださるすべての方が、私のようになってくださることを神に祈ります。このように鎖につながれることは別ですが。」（29節）**

**私はこの言葉がパウロが弁明の中で一番言いたいことだと思います。「王だけでなく私の話を聞いている全ての人が私のようになって欲しいと神に祈り願う」それはこの聖書を読む私たちの誰に対してもパウロが「私のようになって欲しい」と言っているのです。**

**「私のようになって欲しい」一見すると何とも傲慢な言葉のように思えます。有能なビジネスマンが「私のように有能で仕事のできる人間になれ」と言われたり、料理がとても得意な人が「私のように料理上手になってね。見て覚えてね」なんて言われると私たちは気が重くなり、自分の能力のなさを嘆きます。反対に私たちが誰かに「私のようになって」と胸を張って言うと「何偉そうなこと言ってんだ」と言われかねません。**

**「私のようになって欲しい」これはもちろんパウロが自分に誇りを持って「自分のように立派な人間になって、立派な伝道者になって欲しい」と言っているのではありません。私のようになる、それはかつてイエス・キリストを信じる者を迫害して教会を迫害してイエス様を迫害する多くの罪を犯した罪深い者だった。しかし、イエス様はこんな罪深い私をお見捨てになることなく、私に出会って下さった。こんな罪深い私のためにイエス様は十字架にかかって死んでくださり、私の罪を贖い赦して下さった。そして死から甦られて今も生きておられる。イエス様はこんなどうしようもない者をイエス様の十字架と復活の福音を宣べ伝える者へと召し出して下さっている。イエス様によって私は闇の中を歩む者から光の中を歩む者へとされた。今の私があるのはただイエス様の恵み。アグリッパ王よ、そして私の話を聞く全ての人よ、どうかあなたも私のようにイエス様を救い主と受け入れて信じる者として歩んで欲しい。一人でも多くの人がイエス様に出会って闇から光に歩む者と導かれて欲しい。こんな私が愛されて生かされているその喜びに包まれている。どうかあなたも私の喜びの姿を見て欲しい。そのようにパウロは私たちに訴えるのです。**

**本日私たちに与えられています旧約聖書の箇所は列王記下2：9～10です。ここにはエリヤという預言者とエリシャという預言者が出てきます。エリヤは前に異教の神バアルを信じる預言者集団と闘った預言者です。そのエリヤが天に上げられるにあたってエリシャは「どこまでもあなたについていきます。あなたから離れません」と言ってエリヤから離れようとしません。エリヤはエリシャに「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。」と言います。エリシャは「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と言いました。「あなたの霊の二つ分を受け継がせてください」とは「あなたの正統な後継者にして下さい」ということです。エリヤは「あなたは難しい願いをする。それは神様がお決めになることだから私には難しいこと」と言いますが、「私が天に上げられるのを見たらあなたの願いはかなうだろう」と言いました。そうしてエリヤは火の戦車によって嵐の中を天に上っていくのです。**

**エリヤがエリシャに言うことは「私が天に上げられるのを見よ」です。つまり「私を見よ」ということです。これはもちろん私の預言者としての立派なふるまいを見よということではなく、私に現れる神の業を見よということです。「神の業をしっかりと見届けるんだ。そうすることであなたは私のようになれる。あなたを私の後継者として神がなしてくださる」です。「私を見よ」はすなわち「神の業を見よ」ということです。それはさらに言えば「神を見よ」ということなのです。「私という人間を見るのではなく、神を見よ」なのです。**

**パウロが今日の個所で「私のようになって欲しい」と言っているのは「私に現れる神の業を見て欲しい」ということです。さらに言えば「神を見て欲しい」ということです。エリヤがエリシャに言っていることと同じです。私に現れる神の御業を見て欲しいのです。神様がこの罪深い私をどんなに愛して下さりどんなに大きな御業をなしてくださったのか。そして、その神様の大きな御業によって今私は喜びを持って生かされている、そこに神様の御業を見て欲しい、その大きな愛の業をなして下さる神様を見て、神様を信じる者になって欲しいということなのです。**

**パウロが「私のようになってくださることを神に祈ります」と訴えたところアグリッパ王も総督フェストゥスもアグリッパ王の妹のベルニケも陪席の者たちも立ち上がりました。人々は誰もパウロに罪を見出すことはできませんでした。「あの男は皇帝に上訴さえしていなければ、釈放してもらえただろうに」アグリッパ王はこう言って恐らくはエルサレムに帰って行ったのでしょう。パウロの弁明という名の説教を聞いて、パウロのようにイエス様の十字架と復活の福音を信じる者が聞いていた人たちから現れたかどうかはわかりません。では、パウロの説教は失敗だったのでしょうか。彼の「私のようになって欲しい」切なる訴えは誰の耳にも心にも届かなかったのでしょうか。**

 **「兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。」（フィリピ3：17）**

**「わたしに倣う者となる」それは「私のようになる」ということです。パウロは聖書の中で繰り返し「私のようになって欲しい」と語っています。たとえ、この時にはすぐにはこの言葉は聞いてもらえなくてもパウロは繰り返し繰り返し語って、一人でも多くの人が私のようにイエス・キリストを信じて歩む者となって欲しい。私を見て、私に現れる神様の大きな御業を見て、神様を見て、神様を信じて欲しい。パウロは切なる祈りを込めて福音を語り続けるのです。何よりも生きて働いて下さるイエス様に信頼して福音を語り続け、御言葉の種を蒔き続けるのです。その結果、多くの人が救われてパウロのようにイエス様を信じる者となったことは歴史が証ししています。そして、パウロの伝道があったからこそ、地の果てに至るまで福音は広がっていき、今私たちはこうして諏訪教会で神様を礼拝することができているのです。**

**私たちの伝道の業もパウロと同じです。「私のようになって欲しい」「私を見て欲しい」そんな大それたことは言えないと思われるかもしれませんが、こんな罪深い私がイエス様の十字架と復活の愛によって罪赦されて今生かされている。イエス様はこんな私を愛して下さっている。その喜びに生かされる者にあなたもなってほしい、それが私たちの願いです。私を見て欲しいのは私に現わされている神様の大きな御業を見て欲しいのです。神様を見て欲しいのです。私たちはパウロが繰り返し繰り返し「私のようになって欲しい」と語ったように、一人でも多くの人がイエス様を救い主と信じて歩んで欲しいのです。暗闇から光の中を歩む者となって欲しいのです。私たちも何よりも生きて働いて下さるイエス様に信頼して福音を語り続け、御言葉の種を蒔き続けるのです。たとえすぐには実を結ばなくても、あきらめずに御言葉の種を蒔き続けていくのです。新しい年度も祈りつつ伝道の業に励んでいきましょう。**